

彙報

昭和五十七年十二月十八日、東海大学湘南校舎11号館に於いて、文明研究会大会と総会が開催された。総会では、本会会則（本誌本文末尾に掲載）と、本会役員および本誌の応募要項（本誌おもて表紙見返しに掲載）が採択され、更に昭和五十七年度の決算案が承認され、本年度の会務報告と来年度の予定等々が報告された。

昭和五十七年度 文明研究会大会

講演

『日本文明の特徴』 本学教授 石田一良

研究発表

『日本靈異記』に見られる地獄意識について 本学大学院生

田崎篤朗

『ギリシヤ悲劇作家及びアリストファネスにおけるディオニッ

ソス観』 本学大学院生 中津海理恵

昭和五十七年度 東海大学文明研究会例会

四月例会（四月二十三日）

『カースト社会の社会変動』(Social Mobility in Caste Communities) 本学大学院生 小山義則

六月例会（六月二十八日）

『偽ディオニシウス・アレオパギタの思想的背景』 本学大学院

生 桜内正美

『日本靈異記』に見られる地獄意識について 本学大学院生

田崎篤朗

七月例会（七月五日）

『キルケゴールとイプセン—構造的分析—』 本学大学院生 岩原武則

『ミノア時代におけるクレタ人の心性について』 本学大学院生

安田衛史

十月例会（十月二十二日）

『コーシーの極限について』 本学大学院生 木島文彦

文明研究科修士論文題目

桜内 正美 『偽ディオニシウス・アレオパギタの神認識について』

田崎 篤朗 『日本靈異記』に見られる地獄意識について——現

報をめぐって——

中津海理恵 『ギリシヤ悲劇作家及びアリストファネスにおけるデ

イオニッソス観

三宅 立夫 『バイドン』に於ける *deirepos thous* について

——シミアスの発言 (Secd) の謎——

山崎 剛紀 『トインビー批判の研究——比較文明論の可能性に関

する一考察——

文明学科卒業論文題目

【文明アジア課程】

安藤 正巳 独立以後のインド初等教育について

池田 泉 バリ島細密画における宗教性

井土 雅也 オスマン帝国のエジプト征服

遠藤 隆一 クルド民族運動——Sheikh Sait の反乱——

小柳 司 中国文化大革命以後の教育

杉山 年弘 アル・ガザリーの思想と回心についての一考察

鈴木 孝至 中国経済における石油について

田中 重利 現代の中国経済

豊泉 雄士 近代中国経済に関する一考察

長橋 重幸 一八五七年大反乱におけるナーナー・サーヒブの行動について

馬場 英典 エジプト・マムルーク朝における軍隊組織について

の考察

松阪さとる マフディーの反乱の原因について

松本 健 近代インド社会に於るカースト制度の弊害について

溝辺 好信 霧社における高砂族理番事業の問題点

三宅 和広 イランのカナート・システムに関する一考察

織田 和彦 京劇——大衆とのつながりと魅力を問う——

渡辺 直樹 中華人民共和国成立後の教育改革

【文明日本課程】

池尻 淳一 桑原武夫における「日本近代化論」の一考察

伊澤 夏日 貞永式目の道理

糸川 公常 東大寺法華堂に関する一考察

大崎 由美 孝謙女帝

小田 智之 尾崎行雄の「理想的国際関係」論

亀野 武司 日本語における省略の論理——「雪国」を例に英訳との比較研究——

熊切 直之 飯塚浩二の世界史観

澄田 敏代 平安時代の貴族の食生活——母屋の大甕にみる——

関 正一 近世農書にみる越後の農業——水稻耕作曆を中心として——

高田 重幸 映画監督市川崑論

高橋 修一 高杉晋作に見る攘夷思想と夷人観

友田 貴子 古代中世における日本人の鬼神像

中野 雅之 最澄の戒律思想——国家意識との関連において——

長崎 章子 日本古代における神観念——特に蛇神をめぐる——

西村 保彦 井原西鶴論——西鶴の武士観——

畑 敦子 「班田収授法」——口分田の班給について——

福島 保 吉田松陰と〈誠〉

松村 隆史 勝海舟研究——海舟の求めた国家像——

三田真理子 藤原氏における神仏習合とその思想——玉葉にみる兼実の祖神観——

村山 東 日本人に於けるリーダーシップについての一考察

森田 恭子 日本古代のアニミズム——古事記の中のアニミズム

柳沢 佳枝 中世武家家訓の研究——武士の仏神観と正直な心について——

生田 絵里 若衆歌舞伎に見る衆道の一考察

池田 葉子 日本画の近代化に対する一考察——菱田春草とその芸術——

伊東 正伸 テニスブームについて

稲葉 好彦 『人生劇場』における義理の研究——

内田 祐一 松浦武四郎『近世蝦夷人物誌』の一考察——告発書としての『近世蝦夷人物誌』——

大下久仁子 『南方録』にあらわれた利休の茶道

小野沢 洋 大宅壮一『無思想人』宣言』における一考察

梶 博文 東大寺正倉院五十六鏡

金子恵理子 教育と社会——校内暴力を中心として——

川村美保子 『愚管抄』における歴史思想

金野富美子 チリ地震津波後の三陸沿岸地域の実態について

小芝 聖徳 『西郷南洲遺訓』の一考察

佐々木一政 伊能忠敬の研究——忠敬像をほりさげる——

佐藤 隆志 地理学者三沢勝術の風土認識にみる郷土地理観

進藤 優子 夏目漱石の作品における文明と女性

関 英二 谷中村における田中正造の一考察

十河貴美恵 坂本龍馬と薩長同盟——龍馬の商人的感覚——

高見 裕子 足利尊氏像——『太平記』『梅松論』『神皇正統記』に表れた足利尊氏——

露木美恵子 ミカン農業の発展と農産物自由化——南足柄市の果樹作——

中川 浩司 相模国中世第一期城郭研究

中村 清一 日本人の心的原理——『雪国』に見る「甘え」の一考察——

西 淳伸 近代日蓮論——明治期に於ける日蓮の継承者——

新田 昌宏 都市の拡大と水需給問題

橋本 浩二 千利休茶湯の研究

島山 元 日本の近代スポーツ史——明治期からの外来スポーツ——

早川 敦子 日本と中国の文化交流史——正倉院にテーマを求めて——

伏見 寿章 上杉鷹山とその治政について

藤谷 勉 夏目漱石に於ける『自己本位』の一考察

安原ひろみ 森鷗外の女性像——日本の家族制度との関連——

吉田 昌史 戦国時代における太閤検地——文禄三年撰津国芥川郡天川村の検地——

【文明東アジア課程】

阿部 俊夫 プロレタリア文化大革命期「大衆路線」にみる党とコミュニティ——毛沢東の発言を中心に——

飯田 千里 老子の思想——道の存在と否定媒介の論理——

今井 正 清の太祖とサルフの戦いについて

岩崎 良江 文献を通じて見た中国製紙術——唐から元に至る名

紙と生産及び特殊用途——

大久保充治 中国の初期における人口問題

大津 和子 中国の女性解放における太平天国の意義

岡田 真一 元世祖忽必烈日本招諭の真因

尾崎 大三 モンゴル大帝國建国に於ける成吉思汗の思想と発想について

小沢 路子 孟子による王道政治論

加納 久嗣 三元里抗英闘争事件

後藤 高明 後周世宗の殿前軍強化について——殿前軍の性格の検討——

後藤 哲郎 魯迅の医学志望の動機及び医学を捨てて文学を志望した動機について

佐藤 普子 中国の書——六朝社会における書について——

高柳 勝 五斗米道教団——五斗米道教団の成立および目的と性格について——

田村 優美 婚礼儀式における礼物について——漢代から唐代における——

手塚 貢 郭沫若の思想的変遷——日本亡命前後の文学作品から——

中島 民雄 漢初の集団における精神的結合紐帯についての一考察——漢の高祖集団にみる任侠の精神——

中村 則昭 太平天国拳兵前の運動——馮雲山の役割——

西塚 聡美 商鞅について——商鞅变法を通しての人物評価——

萩原 直樹 中国における木琴

原 広昭 清末哥老会組織と内部集団

原 広則 中ソ対立——東部国境問題における一考察——

三原 弘 伊藤博文暗殺事件

宮崎 裕幸 中ソ論争と平和共存政策について

目黒いつ子 道教の鬼神と民間祭祀

矢口富美子 唐代に於ける飲茶と茶道の成立

柳川 敏行 大躍進期における農業の位置づけ

山内 慎一 日本帝國主義下における満州の抗日運動——間島五・三〇事件の一考察——

吉村 朝見 黄海海戦——清國北洋艦隊敗北原因の一考察——

渡辺 達也 アヘン戦争直前におけるアヘン対応策

高山 直樹 第四期人口抑制政策について

【文明南アジア課程】

明石 和仁 古代インドにおけるバラモン教と仏教——ある正統と異端の比較——

阿部 良仁 近代インドとガンディー主義

岩田 誠次 原始仏教における苦の概念

大瀬音一則 原始仏教における自我と無我

大野 由美 インド近代文学史におけるブレーム・チャンドとラビンドラナート・タゴールの思想とその比較

小岩井睦子 インドに於いて何故原始仏教は滅びたか

後藤 仁 東洋における身体論——ヨーガを中心に——

佐武 恭子 「住心品」と庶民の救済

佐藤 一記 自治をめぐるインド国民会議派の分裂

篠田 京子 シャンカラ哲学における存在論

嶋倉 健晴 ヤージュナバルキヤのアートマン論をめぐる考察

嶋田智恵美 ナーガの系譜

関野 宏 マス法典成立時代におけるバラモンの権威回復——クシャトリヤとの関わりを中心として——

摂待 公男 ソ連のアフガニスタン介入への過程とその影響

富所 剛 インド、中国における武術の発祥と思想について

中野 和智 法華経における一念三千の法門

仲村 浩一 オーロピンド・ゴージュの思想と近代インドにおけるその位置

西原 千夏 Garudaのイメージの日本への流伝

松村 孝範 インドにおける仏教美術の完成と変貌

諸根 文仁 不可触民制度——もう一つのインド民族解放運動

諸星 由美 亡命者ラス・ビハリ・ボースが見たインド独立運動

山田 素直 指導者ガンディーとネルーの比較

在日インド人の社会調査

【文明西アジア課程】

青山 貴 ロシアの中央アジア進出に関する一考察

池田 恵子 ルバイヤートの精神——オマルハイヤームの素顔をみて——

石井 啓蔵 セリム三世の「ニザム・シェディード」に関する一

考察

伊藤 紀子 アケメネス朝ペルシヤ成立期についての一考察

今井 説子 ジャラルル・ツ・ディーン・ルーミーの神秘主義的実在体験

字都木和幸 クルド人民共和国樹立時のカーズィー・ムハンマドの役割について

大崎 進 南イエメン社会の変動

岡沢 基博 現代のルワラ族の生活形態の変化に関する一研究

菅 美千代 サドリディーン・アイニ

神田 成子 モッラー・サドラーの生涯と哲学

小林 弘 タンズイマートへの道

後藤 敦子 古代イスラエルにおける預言者についての一考察

佐藤 光子 ターハー・フセイン覚書

新本 修 トルコ語における文字改革について

田中 清明 東アフリカのイスラーム化について——その一考察

築根由起乃 ムハンマドの対ユダヤ教政策における一考察

手塚 隆夫 メフメット二世のイスタンブール復興政策における一考察

友常 恵子 R.N. Fryeのイラン史の方法について

中島満寿美 オスマン帝国近代化におけるNank Kemalの活躍

長沼 幸子 ナクシュバンディー教団の活動とその特徴

長谷川幸子 現代におけるベドウィンの生活変化に関する一考察

古屋 裕子 農地改革によるボネ共同耕区制の変化

本多みゆき アラビア半島のラクダ遊牧にみる家畜と人間の相互
依存関係

松尾 勇治 一六世紀に書かれたギリシア語による「作者不詳の
オスマン朝史」概説と資料について

山内 容子 ムスリム女性のヴェーリング——地域による相違に
ついて——

吉田 美絵 イラン革命の視点

吉田 稔 トルコ民族における遊牧

吉埜 拓史 アジアトルコにおける横断鉄道建設の意義とその発
展について

大久保裕文 アル・ガザリーの引退とスーフィズムの受容

川嶋 功一 日本人のイラン観

大津 文章 イラン農業の概要

【文明ヨーロッパ課程】

浅見 聡 時間について

内田 真弘 ヨーロッパにおける日本のイメージ

山下 真弘 ジャズの精神と哲学

【文明東欧課程】

青井 信達 キプチャク汗国の支配体系

幾島 正美 飲酒文化とウオッカ

石井 久 チェーホフの生涯と彼の作品にみる孤独

大谷 雅人 ロシア構成主義の源流

小野 陽一 エス・エルの理論と行動の特質について

小柳 雄二 中世ロシアにおけるイコン——画家アンドレイ・
ルブリョーフの偉大なる功績——

佐藤 智美 ルーマニア建国の諸問題
沢田 幸雄 プロレタリア革命における政治家レーニンと文学者
ゴリキーとの関係

鈴木 里香 ロシア語動詞における完了体と不完了体——副詞と
の共起より——

高沢 一弘 大帝ピョートルの専制政治による近代ロシアへの変
貌

高野 琢郎 イコン美術とアンドレ・ルブリョーフ
高橋 優 甦るアナキズム

高山万寿美 プレハーノフの思想とそれに関わる運動
橘 里恵 異民族侵入による東欧諸国の文明の変遷——特にモ
ンゴルとロシアについて——

津田 実穂 エカチェリーナ二世時代のロシアにおけるフランス
文化の影響

土屋 光広 プーシキンの恋愛詩に見る彼の人間的な成長
出路 晋哉 第二次ブルガリア帝国崩壊の根本的原因

富野 明彦 北方領土問題をどう見るか
夏目みゆき 日本人の東欧観について

橋本 仁 ガボンとガボン組合
深井とも子 キエフ・ロシアにおける宗教と社会——異教崇拜と

キリスト教国教化——

キリスト教国教化——

藤井 博美 一二〇四年コンスタンチノール陥落の諸原因

三上 貴士 ニコライ・ゴゴリ

元吉 健一 ステンカ・ラージンのロシア史における意義

山本 啓一 中世ルーマニア史の一考察——ヴラッド・ツェペシ

山本 裕孝 ユーゴスラヴィアのナシヨナリズム

【文明西欧課程】

新井 和之 オリエント急行

五十嵐豊和 青年アルベール・カミュの生と死に関する試論

池田 幸樹 チャプリンの平和主義の思想と芸術家としての偉大

石井 也子 シモーヌ・ド・ポワヴォワールの女性観——その成

立事情——

石井 保子 ルノアールにおけるヌード論

石原 直明 イタリアパロック建築——錯覚と幻想——

伊藤 幸宏 サルバドル・ダリの古典主義的・宗教的作品に関する

考察

宇賀神敏子 ヴィリの起源と本質について——民間信仰に関する

考察——

遠藤ちづる 《ゲルニカ》における牡牛の意義

太田 雅代 カミュの不条理の思想

皆藤 伸 キリスト教の悪魔観

鎌田まゆみ ウィリアム・ハーヴェイの「血液循環」における近

代科学への貢献

川村 靖 ルソー——その教育観に関する一考察——

木之下芳明 モラリスト——ケストナー「ファーマン」を中心

熊坂 好美 からくり人形研究誌

黒岩 誠司 一八世紀とロココ文化——ロココ文化批判に対する

一考察——

兄玉 陽一 ヒトラーの世界観

小林 裕子 ナチスにおける宣伝——ヒトラーとゲッベルス

小山 勝浩 中世における通商国家ヴェネツィアの興隆について

斎藤 直子 ニーチェにおける救済思想

斎藤 芳美 ヨハネス・ケブラーによる天文学と占星術

定兼加代子 ホメーロスにおける動物の位置——動物から見た神

人間——

柴田 守 ジャズ界におけるマイルス・ディビスの復帰と意義

陣ノ 行輝 アヘン戦争の背景——欧米列強帝国経済主義・侵略

史の踪跡——

高橋 和浩 黒人ゲッターにおける悪循環のシステム

高橋 徹 ハイデガーの「存在と時間」における現存在の死の

考察

塚本 和弘 商業的発想によるヴェネツィア共和国の運営

富井 達也 立法化とヒューマニズムから見た安楽死

中山 清輝 NATO とワルシャワ条約機構に於ける東西独の位

置

永谷 洋文 ダーウィンの進化論とキリスト教
成川 伸子 宗教改革における女性観——カルヴァンの倫理を中
心——

西田 陽子 ソクラテスの教育における「徳」(徳性)の問題に
ついて

畑 祥夫 ヒトラーの反ユダヤ主義

平沢 哲也 パスカルの幸福のための方法

辺見 和史 森鷗外の啓蒙と東西文化

堀口 博勝 黒人音楽における価値観とその歴史

松村 敦文 カエサル「カエサル文集」によるカエサル研究

宮田 千尋 ポッカチヨの『デカメロン』にみるヒューマニズム
——イタリア・ルネサンス期の人間観——

村松 正人 広告比較研究(日本—西欧)

矢野 宗史 アウトバーンの歴史——西ドイツの道路政策を中心
に——

山崎 元貴 日本文化とドイツ文化の比較的考察

利涉 宣暁 R・D・レイン論

渡辺絵里子 ドガの構図における写真術の影響

渡辺 治義 アウグスティヌスにおける神の存在証明について

平野 陽一 『自由意志論』をテキストとして——
テオグニスにおけるアガトス像とアレテーの意味に
ついて

斎藤 洋一 西欧文明の宗教的展望

常盤 薫 ヘロドトス『歴史』におけるイオニアの反乱
望月 隆雄 脳と人間行動

屋敷 完六 『ツァラトゥストラ』の考察——永劫回帰に向っ
て——

八巻 憲一 行動の文学者サン・テグジュペリ

新舗ひとみ 「エセー」におけるモンテーニュの「判断」の考察

井口 出 コペルニクスの地動説における意義

伊阪 千秋 昔話の心理学的解釈——グリム童話より——

石戸谷由美 『イリアス』における神々の特徴

井手 仁義 聖母信仰

牛木 了子 人間としてのジャンヌ・ダルク

大泉 史 イコククラスムに果たした女性の役割

大里扶左子 現代人の宗教意識

小川 洋子 ビザンチン美術におけるイコンの二元性

恩田 正義 イタリア共産党とユーロコミュニズム

加藤 尚子 大聖堂時代のステンドグラス

君和田秀樹 『近代哲学における「われ」』デカルトとパスカ
ル

熊本 寛江 スペイン画家・ベラスケスの絵画(『マルガリータ王
女』における役割と時代考察)

源司 幾乃 中世騎士の人間観(『ニーベルンゲンの歌』と『ヴ
オルスンガ・サガ』における人間観の比較)

小林 典子 精神薄弱児における統合教育について——差別消滅

の手がかりとして——

小堀 宏泰 安息日のなかに潜む今日的意義

齋藤 敦子 「狼」伝説と実態

齋藤真由美 グリスマルヘンと現代メルヘン考——その相互関係

について——

佐藤 秀次 現在における西ドイツマイスター制度について

椎橋 芳己 ルソーと自然

島影 正子 マニエリスム——寓意の世界——

下津 公次 ナポレオンの没落と伝説

菅野 由美 J・D・サルンジャー文学における不条理の考察

田村 典子 コペルニクスの地動説について

塚本 章栄 ヨーロッパにおける独仏関係と欧州統合

中尾安紀子 通商国家ヴェネツィア共和国——強国としての繁栄

と衰退の原因

長倉 保二 欧州の自動車産業と日本の自動車産業の比較的考察

西田 武季 ニュートン光学

野田 雅彦 文学者アルベール・カミュが求める人間像

橋本 博康 貿易摩擦の背景——一つの例として日独の文化的相

違を考える——

畑端 尚文 ガリレオ・ガリレイの「地動説」

原田裕美子 芸術と社会の関係——ミレーを通して——

布施 一代 イギリスにおける魔女迫害

細野 肇 時代の犠牲者カルヴァン

本堂ユリ子 ラブレールにおけるユマニズムとキリスト教の共存に

ついて

正村 貴志 偏見的ジイド論——「法王庁の抜け穴」周辺に見る

ジイド——

町田 知子 ビューリタニズムとアメリカ

丸山 智子 人間洞察者としてのロートレック

村松さより 魔女迫害にみるスケープゴート

八木橋智子 ジャンヌ・ダルクの宗教裁判

八巻 幸彦 イタリア・ルネサンスの先駆者ジョットの人間像に

ついての一考察

山田 浩史 コリント人への第一の手紙「愛の讃歌」

若林 徹也 現代文明における科学者の社会的責任

渡辺 和隆 人類と機械におけるサイバネティクスの考察